謹詠

教育百首

特258
575

始

正誤表

	誤	正
一頁 二行目	今古	古今

特258
575

謹詠

教育百首

昭和十四年十二月寄贈

著者寄贈本

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟

ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持
シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智
能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世
務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩
急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運
ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣
民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯
彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子
孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シ
テ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民
ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコト

ヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

教育ニ關スル御沙汰

大正四年十二月十日下シ給ヒ翌十一日官報第千九號文部省訓令第八號ヲ以テ公布

皇考夙ニ心ヲ教育ノ事ニ勞セラレ制ヲ定メ令ヲ布キ又勅シテ其ノ大綱ヲ昭ニシタマヘリ朕遺緒ヲ紹述シテ倍〻其ノ振興ヲ圖ラムトス今ヤ人文日進ノ時ニ方リ教育ノ任ニ在ル者克ク朕カ意ヲ體シ以テ皇考ノ彝訓ヲ對揚

セムコトヲ期セヨ

教育ニ關スル御沙汰

昭和三年十二月十日降シ給ヒ翌十一日官報第五百八十七號文部省訓令第二十號ヲ以テ公布

祖宗ノ國ヲ經スルヤ教學ヲ先ト爲ス皇祖考夙ニ學制ヲ頒チ更ニ宸勅ヲ降シ昭ニ教育ノ大綱ヲ示シタマヘリ皇考遺緒ヲ承繼シ又聖諭ヲ降シテ先朝ノ洪範ヲ申明シタマヘリ朕今列聖ノ遺圖ヲ嗣キ篤ク教化ヲ敷キ以テ人

心ノ歸趨ヲ正クシ大ニ學藝ヲ振ヒ以テ國運ノ伸張ニ資セムコトヲ念フ局ニ教學ニ當ルモノ其レ能ク朕カ意ヲ體シ夙夜淬礪祖宗ノ大訓ヲ光昭ニセンコトヲ努メヨ

序

教育の重要にして、寸時も忽諸に附すべからざることは、今更贅言を要せざる所にして、其の教育の根柢たるべきものは、明治二十三年十月三十日に下したまへる教育に關する　勅語是れなり

回顧すれば、當時我が邦には種々なる思想雜然として行はれ國體と相容れざる外來の思想に心醉して、忠孝の大義を誤るが如き言説をなす者尠からざりき、是に於て、畏くも　明治天

皇は深く　御軫念あらせ給ひ、我が國教育の根柢を明らかにし國民の歸嚮すべき道德の大本を昭示したまへり、これ實に永遠不易の　聖訓、萬古不動の大典にして、教育の基礎茲に確立せり、されば我が國民は上下の別なく長幼を問はず、この畏き　叡慮を奉戴し、宏大なる　聖訓を遵守し、以て皇國の臣民たる本分を盡さざるべからず、不肖菅麿居常此の　聖訓を拜誦して感激措くこと能はず、乃ち其の御主旨を順次和歌に謹詠し收めて教育百首と謂ふ、從來和歌を以て教化に資せるもの、本居宣長翁の玉鉾百首ありて弘く世に行はる、この教育百首も亦此の趣旨に外ならず、其の措辭構想固より拙劣なれども微衷の存する所を諒とし、幸に一讀の榮を賜はらば、不肖の本懷これに過ぎざるなり

昭和十二年四月

野田菅麿識

謹詠 教育百首

元官幣大社熱田神宮宮司從四位　野田菅麿謹詠

恭しく惟るに

允に文に允に武に、今古不世出の　聖主におはします　明治

天皇は、深く教育の事に　御軫念あらせ給ひて、明治二十三年

十月三十日、宮中に山縣内閣總理大臣、芳川文部大臣を召させ

られ親しく教育に關する　勅語を下し給へり、不肖菅麿謹み

て其の　聖勅を拜し畏みて詠める歌

千萬の經典に勝りて尊きは
斯の御教の大御言宣
漂蕩へる人の心の浮雲は
速く晴れよとて宣らせ給へり
勅語あふぎ畏み築き建つる
心の柱動かざらなむ

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と宣らせ給ひし　大御心
を畏みて

天神の命かしこみ二神の
修理固成し大八洲國
風の音の宏遠き神代に天照す
大神の肇めし日の本の國

葦原の葦の一葉も風たえて
動かぬ國は皇祖皇宗ぞ固めし
枯れ凋む民草もなし皇祖
皇宗の惠の深き我が國
我カ臣民克ク忠ニ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
肇國を知らしし時ゆ天皇の
御代を禱らぬ民草もなし

(田道間守)
赤誠は顯れにけり御陵に
哭泣て捧げし香菓に

(武内宿禰)
天地を貫く大人の眞心は
盟神探湯の湯も恐れざりけり

(和氣清麻呂)
底濁る弓削の川波せきとめて
朝廷まもりし臣ぞたふとき

(菅原道眞)
漢才を和魂に鎔解よと

遺誡ましつる菅原の神

（楠木正成）
萬世に御名は流れて湊川

仰ぐは公が忠誠なりけり

（新田義貞）
眞心をこめて捧げし劍をば

神もうけひく稻村が崎

（名和長年）
當時を追憶かへせば畏しな

天皇を奉迎し船上の山

（兒島高德）
唐詩をやまと島根の櫻木に

書きて後こそ世に匂ひけれ

（織田信長）
苅蔣の亂れし御代も倭文機の

織田の公こそ鎭定ましけれ

（豐臣秀吉）
尾張野に生ひし大木の下蔭に

倚りてぞ仰ぐ豐臣の公

（德川家康）
東照る神と齋くも宜なれや

皇國のために勳功ある公

（德川義直）
劒太刀尾張の敬公は皇の
道に力を盡し坐しにき

（德川光圀）
國體をよく明徵めて大御系譜
正しし書は大日本史

（高山正之）
大宮を伏し拜みて慷慨つる
忠誠き臣ぞ世の鑑なる

（本居宣長）
寢ぎたなき人の心も鈴の音の
清けき音に目を覺しけむ

（蒲生秀實）
心碎き誠款ささげて御陵を
明徵し奉りし臣ぞたふとき

（賴久太郎）
日本の國體の尊さも
書き遺したる日本政記に見えけり

（平田篤胤）
世の中に狹霧こめたる誣說を

（佐久良東雄）
山佐久良花と散りても後の世の
息吹はらひし大人ぞたふとき

（伴林光平）
墨染の法衣ぬぎうて皇の
龜鑑となれる東雄の大人

（坂本龍馬）
御夢にも現れぬべく眞心を
御爲にとこそ振ひ起ちしか
捧げまつりし人をしぞ思ふ

（乃木希典）
先立し我が兒二人に劣らじと
天皇の御供に身をば捧げつ

（東郷平八郎）
寄せ來つる對馬の沖の敵艦を
擊ち沈めにし勳功たかしも

克ク孝ニ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

（養老孝子）
瀧の絲のながき世かけて匂ふなり
親にささげし酒のかをりは

（阿新丸）

五百重なみ千重浪こえて親を思ふ
孝順も高き佐渡の島松

（楠木正行）

無き數に入にし後も匂ふかな
吉野の山の若ざくら花

（芦田爲助）

雨ふれば親の奥つ城ぬらさじと
傘さしかけし孝心あはれ

億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

億兆一つ心になりてこそ
我が皇の國は固けれ

世世の祖の濟しし功績を鏡にて
幾よろづ世も仕へざらめや

日の本の大御國體はかにまた

比べ見るべき國なかりけり
外國に比類はあらじ日の本の
春の精華の山ざくら花
神代より根ざし初めけむ教草
我が國人の摘みはやすべく
爾臣民父母ニ孝ニ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
忘るなよ天雲しのぐ不二よりも

猶いやたかき親の慈愛を
父母の爲を思ひて朝な朝な
詣でをろがめ產土の森
身を修め名を穢さぬぞ子孫の
祖先に仕ふる道にはありける
親と云へば父母のみに限らじな
代代の祖あり元つ祖あり

子孫の影に立ち添ひ守るらむ
眼にこそ見えね祖先の御霊は
亡き親に生けるが如く仕ふるぞ
人の誠の道には有りける
春くれば花をり捧げ秋立てば
紅葉たむけて霊祭れ子等

兄弟ニ友ニ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

親の血を互に分し兄弟は
睦びて親の心安めよ
足柄も箱根の山も富士の嶺に
連りてこそ名高かりけれ

夫婦相和シ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

夫と婦は心あはせて親和く
家の内外を治め往かなむ

男山松の緑の常磐に
變らぬ色を心ともがな
麻環の絲一すぢに仕ふるぞ
婦女の道の貞操なりける

朋友相信シ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
諸ともに親みあひて朋友は
兄弟のごと睦び往かなむ
各自へだてなくして誰もみな
信義つくすぞ朋友のみち

恭儉己レヲ持シ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
高けれど天に跼り堅くとも
心して履めあらがねの地
鉾杉の梢たかくは掛れども
俛伏し咲けり藤浪の花

博愛衆ニ及ホシ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
弱きもの貧しきものを援助るぞ
富める人等の義務なるべき
魚は淵に鳥は林に人は人の
愛情の蔭に頼るべかりけり

學ヲ修メ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
學校の庭に生ひ立つ撫子は
己が向き向き咲ぜてしがな
怠らず緩まず倦ず研ぎ磨け
心の玉のひかり出るまで
若竹の節いや高く抜け出て
世に學德ある人とならなむ
海の外の書の林に遊ぶとも
踐みな違へそ日の本の道

業ヲ習ヒ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

大君の大御心に叶ふらむ
國民皆が業に勵まば
日に進む世に遲れじと勤勉て
習ふ業には心たゆむな
咲き滿てる黃金の花も家の業
勤む事ぞ根ざしなりける

以テ智能ヲ啓發シ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

啓發ゆく世の器械にはみ空飛ぶ
鳥の翼も及ばざりけり
電を夜の燈火に引く事も
卽て智能の力なりけり
大空を飛びゆく航空船を仰ぎても
人の智能の奇しさを知る

限りなき雲の果まで稲妻の
光の間にも問ひつ答へつ
徳器ヲ成就シ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
人毎に徳器し無くばいかばかり
學びたりとも効果やなからむ
目輝く黄金も珠玉も及ばぬは
人のこころの徳器なりけり

進テ公益ヲ廣メ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
盡すべき事は異れど各自
勗め勵みて公益廣めむ
公共の事業に盡しし人人の
功績は絶えじ萬世までに
世務ヲ開キ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
國土を開拓き給ひし神業に

習はばいとど世は開けまし
經營の事業かたけれど吳竹の
社會の爲にとて務めざらめや

常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

海原の底より深き叡慮に
欽定め給へる憲法かな

留意して國の法則を守りなば
世に波風は立たじとぞ思ふ

一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

事あらば皇軍守護神に祈ぎかけて
勇みつつ出征け益荒雄の伴
天皇のため盡す心の至誠には

神祇の御稜威の添はざらめやは
肉の山血汐の川はなすとても
皇國のために盡さざらめや
戰の場にちるとも萬世の
花とこそ仰げ赤き心は
玉の緒の命絶えなむ軍人の
天皇陛下萬歲と叫ぶ雄雄しさ

靖國の神と仰ぐも宜なれや
皇國の爲に果し軍人

以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と宣らせ給ひし大御心を畏みて

天壤の共動ぎなき高御座
比べ奉らむ物なかりけり
引渡す注連の縄の一すぢに

身を盡してぞ仕へまつらむ
玉匣二つなき身も天皇の御爲
國の爲には何をしむべき

是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

平伏して聞くも畏し良民と

宣らせ給ひし大御ことばは
皇國の御楯とはなれ世世を經て
盡しし祖先の末裔はことごと
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所」と宣らせ給ひし　大御心
を畏みて
皇祖皇宗の遺しし御遺訓の

外に賴るべき道なかりけり
雲上の貴き御子孫も國民も
俱に履むべき道ぞ尊き
幾萬する世までも御民われ
斯の御教に違はざらなむ
之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて

皇祖皇宗の傳へし正道は
昔も今も渝らざりけり
斯の道は廣くぞ皇祖の造りけむ
外つ國國の人も行くべく
朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」と宣らせ給ひし　大御心を畏みて
捧持ちて忘れざらなむ朝な夕な

畏き天皇の大みことのり
叡慮を心胸に服膺て純忠に
仕へまつらむ日の本の民
群肝の心にとめて放さず
守り往かなむ勅語の條條
天皇の命かしこみ萬民
一つ心に徳つくさむ

狀狀に道はあれども玉鉾の
徳の道ぞ履むべかりける
神ながら御傳へましし斯の道は
國内こぞりて行くべかりけり
聖訓の道一筋を貫きて
左往き右往き惑はずもがな

謹詠 教育百首 終

追加の歌

教育百首の歌よみ終へて後、更に「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」と仰せたまひし御主旨のほどを拜察し奉るに、學は道を修め智能を啓發する所以にして、業は各人自ら異なるも必ず一業を習得して以て一身一家を立つべきなり、卽ち學と業とは小は修身齊家に始まり大は富國强兵の根柢をなす、抑〻太古　皇祖國を肇め德を樹て統を垂れ給ふや　歷聖之を繼ぎ之を述べ給ひて萬民保全の道を施し給ふ、而して萬神亦各〻修理固成の神業を

承けて、國土を經營し殖産興業に力め給ひ、以て萬物蕃息の基礎を爲し永久に之を守護し給ふ、故に學と云ひ將た業と云ふ、其の本源に泝れば一として神德皇恩に依らざるものなし、茲に謹みて其の一端を詠ず、固より蒼海の一滴を汲み富士の嶺の一隅を仰ぐに過ぎざるなり

思兼の神に乞のみ思慮ふかく
學の業の蘊奥も究めよ

學業ひろく修めて國家のため
盡すぞ人の務なるべき

各自まなびの道に勤勉て
心正しく身を修めなむ

身を修め心正しき人をこそ
眞の人といふべかりけれ

○

怠らず勤め勵みて社會の人に
幸ある業をはからざらめや
石上ふるきを溫ね新しき
業習ひなば惑なからむ
本立ちて末ぞ榮ゆる本なくて
末の榮えし例やはある
爲す業の其の本源を推し究め
明してしがな千千の一つも

○

世の中に何はあれども四季
身にきる衣服ぞ尊かりける
機殿に御衣裳おらしし八千千姫
神のむかしの偲ばるるかな
桑植ゑて蠶を養ふ業は保食の

神の御蔭と思へ世の人
機織りて裁縫ふ業を教へしは
棚機姫の神と知らずや
毎年の行事と營め針祭
棚機姫の神を齋きて
木綿作る業の元祖は畏くも
天の日鷲と長白羽の神

○

白金は千箱ありとも飯なくば
如何でか人の身を保つべき
狭田長田作らせ坐しし大神の
神恩わするな御田作る人
外宮の大神の御徳に五穀の
種は出でけり忽諸にすな

大年に御年若年三柱も
五穀つくる業教へ坐しけり
耕作を助くる牛も靈幸ふ
神の授けし物にぞありける

○

家作る業は神代の手ぶりなり
本を忘るな大工木挽のとも

大工木挽の業の御祖と仰ぐかな
手置帆負と彦狹知の神
八十木種殖林業を始め坐き
大山津見と伊太祁曾の神
金銀鐵工鍛冶の業を守ります
伊斯許理度賣と目一箇の神
石工の業の元祖を尋ぬれば

磐裂根裂の神にましけり

○

病臥し苦瀬に沈む世の人を
醫療治病業ぞ嬉しき
大名持少彦名の二柱
醫藥の業の御祖にぞ坐す
温泉の効驗ありと始めて教へしも
少彦名の神にぞ坐しける

○

護國る我が軍人の元つ御祖
天の忍日と饒速日の神
住吉の三前の神は皇軍の
艦路守らす神にぞ坐しける
勇ましく馳せ往く軍馬も其の元は

神のたまひし物とこそ聞け
梔弓に眞鹿兒矢つがひ一筋に
射放つわざは神の御をしへ
擊劍と柔術のわざの源は
鹿島香取に諏訪の三柱

○

野見宿禰當麻蹶速の對向ひ
角觝の技の始なるべし
俳優の業の起源は久方の
天鈿賣の命なりけり
大宮能賣神の御蔭に家人ら
和合笑ぎて業にいそしめ
和を貴む道の教へぐさ
宮比の神や生し初けむ

導の業の元祖は日の御子の
御先はらひし猿田彦の神

○

酒造る業は進雄久師の神
始わするな酒醸す人
鹽槌の神や守らむ潮もて
鹽つくる業に幸ひ坐しつつ
波浪の穂を蹶散かし漁撈る業
神代ながらの神の御教
海山の幸とり合せ調理の
業始ましし豐受の大神
店開き商ふ業は大市姫
神や始めし人の社會の爲

○

本を忘れ始思はで末にのみ
心ひかるる人は何ぞも
爲と成す業の始は悉に
神と大君との御蔭なりけり
詠めど詠めど詠み盡されず靈幸ふ
神と大君との大御めぐみは

（終）

追錄

日日の心得

一　教育に關する　勅語を遵守し國體に悖るが如き行爲あるべからず

一　朝夕謹みて　宮城を遙拜すべし

一　朝夕御神前神棚を禮拜すべし能ふべくんば神社に參拜すべし

一　朝夕祖先の靈前を禮拜すべし

一　大祭祝日に國旗の掲揚を忘るべからず

一　禮儀を重んじ品行を方正にし假初にも粗暴の言語あるべからず

一　義勇報國の心掛あるべし

座右の銘

初等勅語讀本
學生の座右銘

一　自己將來の目的を立てて必ずこれを達するに力めよ

一　日夜自己の人格を修養することを忘る勿れ

一　一日一日を一小生命と見做し如何程なりとも學業を成遂げよ必ずしも明日を俟つこと勿れ

一　修養に害ある遊戯は一切これを避けよ

一　假にも虚僞を言ふこと勿れ

一　淫猥に近づくこと勿れ

一　飲酒に耽ること勿れ

一　己を責むるは嚴に失するも人に對しては寧ろこれを寛にせよ

一　今日まで知り得たる善を出來得るだけ實行せよ

一　獨立獨行自ら事に當れ苟も人に對して依賴心を起すこと勿れ

一　過失は速にこれを悔い改めよ

一　希望を將來に屬せよ

按ふに我が國に於て、政治界、教育界將た實業界、その他何れの方面に在りても國體の尊嚴を護持し、敬神崇祖の大義を辨へ國民精神の實行に努むべきは、萬人の悉く一致する意見なり、然れども之を口にするは易く、之を行ふは難く、知る者多くして、務むる者は十の一に過ぎず、茲に名古屋市西區和泉町なる高橋正彦氏は先代彦次郎氏以來、公共の事業に力を盡さるるのみならず、その敬神崇祖の志厚きことは當世稀に見る所なり、就中最も吾人の敬服せることは、家人の中一人、必ず熱田神宮に日參するを以て務となし、多年一日の如きこれなり、余の宮司として奉仕中昭和二年九月宮内省より神馬の牽進あるや、これが爲に神馬舍一棟を寄進し、又神苑擴張の際には許多の獻金をせられたるが、なほ頃者御社殿の營繕に方りても、他に率先して獻納の誠意を捧げられたりと聞き、今猶その念の厚きに敬服する所なり、而してまた余が今回編述せる著書の趣旨に共鳴せられ、之が出版に要する一切の資を提供し、普く全國の學校及び圖書館等に寄贈し、余をして本書編纂の素懷を遂げしめらる、今や時局非常の秋に際し舉國一致盡忠報國の精神を强調すべき重大の時機に當り、一入感激の至りに堪へず、茲に特記して同氏の芳情を深謝す

昭和十二年十一月

野田菅麿

昭和十三年一月十九日印刷
昭和十三年一月二十五日發行

著者兼發行者　島根縣那賀郡今市村大字丸原千貳百四拾九番地　野田菅麿

印刷者　島根縣松江市雜賀町八番地　三島藏市

印刷所　島根縣松江市殿町參百八拾參番地　松陽新報社

393
401

終